

Tシャツアート展によるモンゴルとの国際交流の取り組み

特定非営利活動法人NPO砂浜美術館

はじめに

高知県西部に位置する黒潮町。この町に砂浜美術館があります。「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」というコンセプトの建物のない美術館です。館長は土佐湾を泳ぐニタリクジラ。作品は砂浜に流れ着く漂流物や、砂浜についた鳥の足跡。BGMは波の音、夜の照明は月の光。ですから、365日24時間オープンしています。

ここで、毎年5月にTシャツアート展というイベントを開催しています。公募した絵画や写真をTシャツにプリントし、長さ4kmの砂浜に展示するイベントです。広い空と海を背景に壮大な美術館が生まれます。

このイベントは、多くのボランティアスタッフに支えられ運営しています。2006年ボランティアスタッフとして参加してくれた西村優美さんは、その後、青年海外協力隊でモンゴルに派遣され、モンゴルの大草原を草原美術館と見立てTシャツアート展を開催したいと企画しました。企画は2008年12月に動き出し、2009年5月1～5日に砂浜美術館で開催された第21回Tシャツアート展では、モンゴルの子ども、芸術家の作品90点が参加。返却されたTシャツで、8月にウランバートル市内で「第1回モンゴルTシャツアート展」が開催されました。そして2010年には、5月の砂浜美術館、7月の草原美術館でのTシャツアート展を通じて、日本とモンゴルの作品を通じた文化交流に力を入れるため、NPO砂浜美術館と草原美術館実行委員会の共催でイベントの開催にいたりしました。

砂浜美術館では、黒潮町、黒潮町教育委員会等と連携し、地域の子どもたちを中心として黒潮町

オリジナルの国際交流や国際理解を深めるプログラムづくりを行いました。交流を通じて世界に繋がることで、自分たちの町を見直し、国際的な感覚を持てるきっかけを提供したいと思いました。

モンゴルでのTシャツアート展を子どもたちの国際理解のために

外国語教育がはじまる小学校5年生になる前に、海外との関わりを子どもたちに持ってもらいたいという思いから、小学校4年生を対象としてTシャツアート展に参加してもらいました。黒潮町内9つの小学校で4年生が96名います。そして2010年4月末に、モンゴルTシャツアート展の中心メンバーである3名（草原美術館実行委員会・モンゴル芸術家団体・ウランバートル観光局）と、青年海外協力隊としてモンゴルで活動した隊員2名を黒潮町にお呼びしました。3班に分かれてもらい、9つすべての小学校で授業を行いました。モンゴル関係者からは、モンゴルの写真や映像を通して風景や文化を伝えてもらい、青年海外協力隊のメンバーには、自身の体験談や、世界を舞台に仕事をする日本人として話をしてもらいまし



草原美術館で馬に乗ってTシャツ鑑賞



モンゴルメンバーによる町内小学校での授業風景

た。子どもたちは、初めて聞くモンゴル語や話に大変関心を寄せていました。また、4月29日にはTシャツアート展実行委員会メンバー、行政関係者、町民等とモンゴルからの来賓の方とともに、お互いの理解を深め今後の可能性を探る座談会を開催しました。会ではお互いの国の紹介をした後、黒潮町とモンゴルの連携について意見交換がされ、Tシャツがひらひらする風景を通じて文化交流をしていこうというお互いの気持ちを確認しました。

その後7月にモンゴルでの開催後、再度小学校を回り、現地の写真や映像を見ながら、Tシャツを返却しました。Tシャツを手にした子どもたちは、香りをかいだりしながら、モンゴルを旅したTシャツを手喜んでいました。また、「将来モンゴルへ行ってみたい人」という問いには、大多数が手をあげ、自分たちの暮らす黒潮町とモンゴルの生活様式等の違いに関心を寄せていました。

こうした活動を通じての一番の成果は、当たり前前にみえている地元の風景が大変価値があるものだということを、モンゴルとのつながりを通じて地域の人たちが感じてくれたことです。そして、砂浜美術館の考え方や理念、これまでの取り組みだけを説明するのではなく、実際にそのイベントに参加し体感することが非常に重要だと感じました。自分たちが作ったTシャツが実際にモンゴルで展示されている風景や、モンゴルの子どもたちに書いた手紙を手渡して、もらった子どもたちの反応を撮影した映像を見せることで、より現実のものとして実感できたことは、これからの取り組

みの中でも活用できる部分であると思います。

黒潮町独自の教育プログラムとして

一見何もないと思われるひとつの町の砂浜が、「砂浜美術館」という考え方をもったことで、地域にある様々な資源が作品となりました。そして、今回の取り組みでわかったことは、

- ・建物がない美術館なので、世界中場所を選ばず作ることができ、維持管理に費用がかからない。
- ・小さい規模の町でも、そこで行われてきたイベントや文化を通じて直接世界と繋がることのできる。
- ・子どもたちが、お互いの国に移動するような経費をかけずに、全学年の生徒の国際交流が可能である。

今後、砂浜美術館の考え方を、Tシャツがひらひらする風景を通じて世界中に広め、国際化していきたいと思います。その取り組みは、黒潮町と黒潮町民と共に進めていきます。ここでの国際化とは、案内パンフレットを外国語対応するという部分的なことではなく、町オリジナルの考え方を使って、子どもたちを中心とした町民が、自分たちの町に誇りをもち多様な文化や考え方を受け入れ、国際的な視野をもつということです。

これまで砂浜美術館の活動を町の教育プログラムとして継続させて行くことができていませんでした。理由のひとつとして、教育機関は担当の先生が入れ替わると事業の継続が難しい場面があるためです。今後は教育委員会等とタイアップしながら黒潮町の教育プログラムとして位置づけられるように仕組みを作りたいと思います。また、継続するためのスタッフと資金の確保も課題です。今回は補助金(注)を活用させていただき、モンゴルから来賓の旅費滞在費や、子どもたちのTシャツ制作費を使わせていただきましたが、この経験をもとにして、今後は旅行産業等とも連携しながら、補助金だけには頼らない国際交流の仕組みをつくる努力をしていきたいと思っています。

(注) 平成22年度地域国際化協会等先導的施策支援事業(財団法人自治体国際化協会)